



Title	明清時代の時間意識 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	金, 博男
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15067号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85469
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Bonan_Jin_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 金 博男

審査委員	主査	特任教授	武 田 雅 哉
	副査	准教授	田 村 容 子
	副査	教授	吉 開 将 人

学位論文題名

明清時代の時間意識

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、明清時代の時間論を構成する種々のキーワードを検証したうえで、それらが同時期の文学作品においてどのように用いられていたか精査するという方法で、中国人の時間意識をたどることを試みた、野心的な研究である。

本論文の大きな成果として、明清時代の中国人が計時に用いていた、いくつかの計測方法や計測単位の経緯を、おもに文学作品を材料にして明らかにしたことがあげられる。西洋人による「中国人には時間意識が欠落している」との言説が語られたのは、機械時計による計時がはまだ普及していない近世の中国において、時間とはあくまでも経験的なものであったからであると、金氏は言う。金氏はまず、まさしくその経験的な計時システムである「猫時計」なるものを俎上にあげ、その成立と、易学、占術などの学術の分野で観念的に論じられ、発展してゆく経緯、文学作品における活用、そして消滅にいたる経緯を、従来の研究における誤謬を修正しつつ、明らかにした。

「猫時計」につづいては、計測の単位や時間認識のための語彙として、「息」「日曜日」「秒」などを俎上にあげ、検証を加えていく。本来は鼻息を意味していた「息」が、前漢時代からすでに「短い時間」と関係づけられ、文学作品においても短時間の表現として普遍的に用いられていたものの、のちに朱子が考える天地運行の理論のひとつへと昇華していったこと。西洋の一週七日制が新たな時間概念として、中国人の時間論や生活スタイルの中に積極的に取り入れられていく過程で、それが都市の市民に土曜日の夜から始まる娯楽の時間をもたらし、それゆえにまた日曜日の時間を狙う犯罪事件が多く発生するようになったこと。もともと角度を表わす単位として使われていた「秒」が、明末の宣教師の影響を受けて時間の単位として使用されるようになったものの、あくまでもそれは理論上の時間であったのが、清末に至るや、西欧の科学文明の象徴として再認識されたこと。これらを、従来、時間論の研究にはほとんど用いられてこなかった明清時代の白話小説や筆記小説などを分析することで、清朝末期までの中国人の時間感覚の変貌の過程を明らかにしている。

清末の時間論については、特に梁啓超『新中国未来記』を取りあげ、従来の論者が正しく指摘してこなかった、その複雑な時間構造に注目しつつ、小説の叙事に秘められた梁啓超の時間感覚を分析し、「未来」を描こうとしたこの作品が、「壬寅」に始まり「壬寅」に終わることから、梁啓超が干支という円環的時間意識の支配から逃れえなかったとの指摘をする。また、「未来」という時間論へのさらなるアプローチとして、歴代の史書に記録され続けた「詩妖」と呼ばれる予言のスタイルを考察し、未来や終末をテーマとした近代中国の科学小説が、予言の形をもって警世の役割を果たしたのは、古来の詩妖的精神を継承したものであると結論づけている。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、いくつかの研究誌に発表された六篇の論文をもとに、整理・加筆してまとめたものである。第一章、第五章、第六章は、中国語学会『饕餮』（査読無）に、第二章は、日本中国学会『日本中国学会報』（査読有）に、第三章および第四章は、日本時間学会『時間学研究』（査読有）に、それぞれ掲載され、中国文学および時間を研究対象とする学界において、すでに一定の評価を得ているものである。本研究の成果は、中国の文学作品の読み方、特にその時間をめぐる叙事の分析において多大な貢献をなすものであり、明清文学を対象とした意欲的かつ斬新な研究として評価するものである。

なお、審査の過程を通して、以下のような問題点が指摘された。

本論文で扱われるいくつかの分野においては、過去の重要な先行研究への目配りが不足していること。特に近代部分において論述される対象が、都市部に限定されているので、さらに地方の状況についても調査すべきであること。清末小説については、創作のみならず、翻訳についても精査すべきであること。本論が民国以降、現代の時間論に接続しうる可能性を、現代文学などの資料にも言及しつつ論ずる部分があってもよかったのではないかということ。また、本論文に掲載された図表の一部が、いささかわかりにくいレイアウトになっていること、等等である。

指摘された問題点はいずれも、現時点で筆者が十分に自覚しており、容易に修正し得るものであって、本論文の価値を本質的に損なうものではない。また、諸々の課題については、今後の研究の進展により、日ならずして解決されることが期待されるものである。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。